

勝林寺寺報

安樂仏土の依正は  
法藏願力のなせるなり  
天上天下にたぐいなし  
大心力に帰命せよ



けと生まれかわらせないなら、わたしも  
眞実の如来とはよばれまい」という、  
上にも天下にもかつて例のない「願い」  
によりるはげしいはたらき「力」。その  
願いと力によつてつくりあげられ、住持  
じゆうじ一され、かもしだされている世  
界、それが阿彌陀如来の淨土であるとい  
うのです。

私達は、お淨土とかほとけの国といふと、どこか地理的に遠い位置にあるようにも思ひがちです。そしてその遠い国にはどうしたら御参りできるのだろうと思案し、お念佛を励んだり信心を積み上げて往生をねがおうとします。

安樂仏土といふのは、いわゆるお淨土のことです。安らかな法の楽しみに満ちた如来の世界です。そのお淨土の「依正報」というのは、「依報と正報」ということばの略語で、山川草木などの国土自然と、そこにおられる仏や菩薩のことをいふのです。つまり、お淨土の莊嚴へしようと、そこにおられる仏や菩薩のことをいふのです。つまり、お淨土のしつらえ・お淨土のはたらき（これを淨土の功德莊嚴といつていますが）の一つ一つみんなは、といふ意味です。

法蔵原力のなせるなり

「法蔵の願力によつて成就（じょうしゅ）されてゐるものなのだ」ということです。

「法蔵」というのは阿彌陀如来さまの  
多くの名前です。真実そのものを法(ダ  
ルマ)といいます。真実というものは冷  
たい堅い高いものではあります。真実  
には真実なはたらきがあります。それは  
、どんなはたらきかとすると、真実なら  
ざるもの・真実から最も遠いものを、真  
実のなかにとりこもうとする願いのはた  
らきです。そういう願いをもつてはたら  
いてこそ真実は真実たりうるのです。  
『大無量寿經』というお経には、この  
真実のはたらきが法蔵菩薩のはたらきと  
して具象的にとかれていました。ですから  
この経を「真実の教」と親鸞さまは仰い  
でおられるのです。

親鸞さまは、「帰命」という字の左に、その意味を次のように訓として書いて下さっています。

お淨土とは、私達が修業や信仰を積んで往けるようなそんな国ではない。  
眞実の淨土とは、如來の眞実の願・力  
がはたらいていくべき世界。  
だから、わたしたち、とにかくも如來  
のおおいなる願力（大心力）に帰命しよ  
うではないかとおっしゃるのであります。

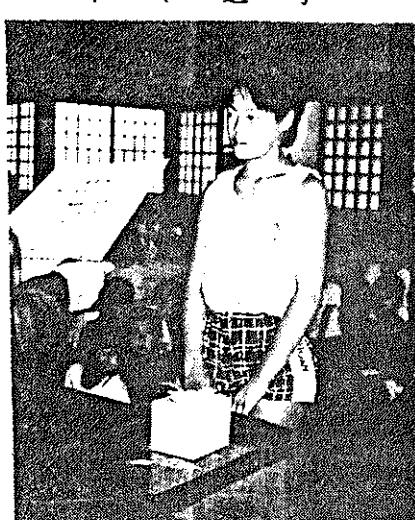
定和也羨

八月十四日

葬儀

A black and white woodblock print illustration of a maple tree. The tree has a thick trunk and branches that spread out. The leaves are depicted with fine lines, showing a mix of green and red colors, characteristic of autumn foliage. Some leaves have fallen from the branches, scattered on the ground at the base of the tree.

十 年 選 王

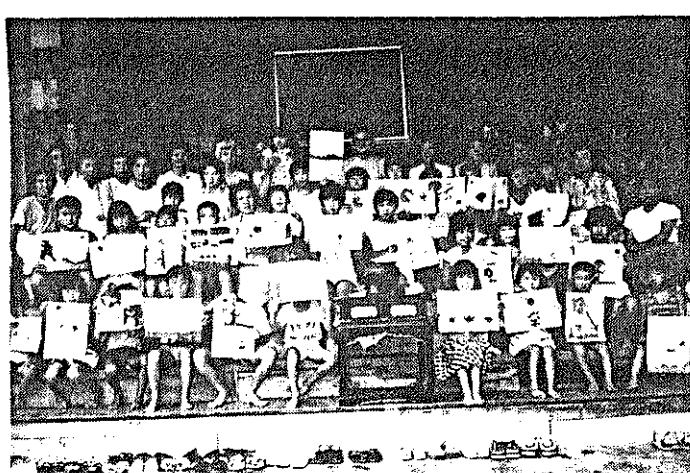


## お め で と う

先日は有難うございました。大変なお世話になりました。どうとう今年で十回を無事終えられました。ご院家さんや婦人会の方々のおげでいゝ勉強をし、また多くの人たちとなかよくなりました。

三月と三十三人、十四人の婦人会の人々のお世話で十八。九日の二日間、ほんとに楽しく学びました。今年は特に仏像の谷垣逸雄先生が指導に加わっていました。生き活氣あるものに盛り上げていただきました。住職の法話やおつとめ指導。作法のおけいこの間あいだにあつた谷垣先生のゲームや西池女先生の紙芝居、それにアニメのビデオの方が子どもには人気があつたようです。写真は、日程の最後で作った工作を掲げての記念撮影です。今回次の表彰がありました。

勝林寺「二世一治研修会」おもてなし



十一日	森戸精毅氏宅法事
十二日	法友研修会（京都）
十三日	出石組坊守会（西宗寺）
十六日	法友研修会（京都）
十七日	十六夜会総会（高福寺）
十八日	仏教と医療の会（京都）
二十一日	山田豊氏宅祥月
二十四日	仏壯仏婦合同役員会
二十三日	出石町福祉大会
二十二日	日生西念寺彼岸会
二十六日	善立寺彼岸会
二十五日	出石組「連研」（西宗寺）
二十九日	「みのりを聞く会」 但馬地区総代研修会

彼岸会議案内

九月二十六日  
午後二時より

「和ヲ以テ貴シト為セ」  
地獄のような争いのなかにあつた聖  
徳太子は、それだけに切実に争いのな  
平和をねがわれました。平和への道へ  
三宝を敬う仏道」をもとめ彼當戸を  
願われました。  
苦惱を越える道をもとめ、みのり  
を聞きましよう。  
御参りください。

牀座施

なにも持たなくとも誰にでも出来る施  
し「無財の七施」のうち、今日は第六番  
目の牀座施（しょうざせ）です。

「林座施」とは、「あなたを待つて  
いたのですよ」と、あたたかな座席を設  
けてお迎えするサービス、ほどこしをい  
うのです。

ところが私達、ついつい来てくださる人を選び好みし、もてなしにも差別をつけてしまいがちです。  
あなたなど来てくては迷惑といわんばかりの扱いをしてしまって、それでその人との人間関係をだめにしてしまったことが随分あったように思います。

如来様は、私の知らないはずと昔から、「設我得仏、十方衆生：若不生者、不取正覺」と呼びつづけてくださいます。十方衆生をみなほとけの座につかせないなら、私もほとけとはなりません。十方衆生を分け隔てなく「ご正客」とよんでもくださるのです。

十方微塵世界のどこで何をしている人も、いえ、ひよつとしたら人から毛嫌いされる五逆や謗法の者をこそ、その人をこそ、「ようこそようこそ」と座席もうけてはたらいてくださるほとけさまが南無阿弥陀仏さまです。

その南無阿弥陀仏のお慈悲のなかにある私達ですもの、あの人もこの人もみんな十方衆生、だれもお念佛のなかのきょうだいです。

6 5 4 3 2 1

バランスのとれた栄養をとる。  
毎日変化のある食生活を。  
食べ過ぎはさけ脂肪はひかえめに。  
お酒はほどほどに。  
たばこを少なくする。  
緑黄色野菜をたっぷり。適量のビタミンと繊維質のものを多く。

昭和五六年に日本人の死亡原因第一になつたがんは、いくつかの原因が重なつて、正常な細胞の状態を狂わしてしまふ恐ろしい癌です。それががんを防ぐといふと、見てつもなく大きなことだと思われるかも知れません。しかし、日常生活の中でがんの原因となる因子ができるだけ取り除くといふ努力はできるはずです。

この十一か条は、毎日の日常生活のなかで少しだけ気をつければだれにでもできる簡単ながん予防の心掛けです。

## がんを防ぐための 12か条



どんな人とも、お念佛のなかで出会わせていただいたら、「ようこそようこそ。」たがいに喜びあえる牀座施。お互いあたたかな座席もうけてようこびあえるのですありますまい。

塩辛いものは少なめに。熱いものはさましてから。  
198、焦げた部分はさける。  
199、かびの生えたものに注意。  
110、日光に当りすぎない。  
111、適度にスホーツをする。  
121、体を清潔に。

「勝林寺テレホン法話」は昭和五十八年の正月元日からはじめました。五年半としました。あえぎあえぎしながら、それでも続けてこれたのは、毎回必ず待ちうけていて聞いてくださる方がいてくださいましたからです。そしてその中で一番お育てにあづかったのは私自身であります。その感謝の気持ちから、内容は貧しいものですがまとめてみました。

ご門徒に一部配布しました。もし知人へ紹介頒布していただければ幸いです。  
（一部300円）

つづいて②、③を印刷中です。

短 信

★七月四日にパークレーから帰国していきました寺の孫とその母三人。はじめての日本でのいろいろな経験に堪能して、八月二十二日伊丹空港から飛び立つてきました。来年はおじいやんがアメリカに来る番よといつて帰りました。

★山口の宇部から横山小蝶さん（故人）のご子息横山達也氏ご一族が、八月十日はるばる墓参されました。その一行の多くは、ほとんど初めてのわが家の故郷であり墓参とあつて感慨ひとしおの様子。古い墓を守つていただきいていた人々へ感謝の心あらたに再会を約して帰られました。永代経志として夏黒衣一領をあげていただきました。

★京都在住の湯口茂造氏より「勝林寺寺報」のお礼ということでご懇意をお寄せいただきました。本堂ご本尊にお供えする「お仏飯器」一対を購入させていただ

テレホン法話

第一集